

第56回 服部良一の試行錯誤と「ブルース歌謡」の誕生

昭和5年、淡谷のり子は『夜の東京』という井田一郎（日本ジャズ草創期に活躍したジャズ編曲の先駆者）が作曲したオリジナルのジャズ歌謡でデビューを飾りますが、ヒットには至りません。淡谷が23歳のときでした。

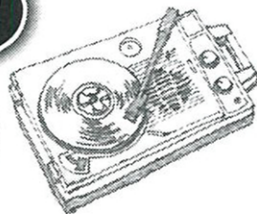
昭和7年、シャンソン『聞かせてよ愛の言葉を』に魅了されたことから、その後はシャンソン中心に、ラテンや映画音楽の日本語カバーをレコーディングする日々が続きました。昭和11年、コロムビアに作曲家・服部良一が入社、服部はさっそく淡谷のために和製ジャズソング『おしゃれ娘』を提供します。あまり知られていない曲ですが、スウィング・ジャズを取り入れた軽やかな佳曲で、淡谷も得意のソプラノを生かし、楽しそうに歌っています。この曲に限らず、この当時の淡谷の歌声は、可憐で、男性なら誰もが引き込まれそうな魅力を備えていましたが、あいにくこれもヒットには結びつきませんでした。

アメリカ産のブルースとジャズの歌謡曲化をめざしていた服部ですが、『おしゃれ娘』が期待はずれに終わ

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎
絵・松本浦



ったことで、当時の日本人の嗜好が『酒は涙か溜息か』に代表される短調メロディーであることを再認識し、『セントルイス・ブルース』やジョージ・ガーシュイン『サマertime』の短調部分を意識した旋律で曲を作り、男性歌手に歌わせます。

昭和12年3月に発売された『霧の十字路』は、やはりヒットには至りませんでした。服部が「ブルース歌謡」に初めて挑んだ曲であり、手ごたえを掴んだ曲でもありません。

マイナーコードで綴られる旋律自体は、さほど耳に新しくは感じられませんが、前奏や間奏で聞かれるサククスやギターソロなどは当時としては新鮮味十分だったことでしょう。歌っていた男性は、前述の『おしゃ

れ娘』で伴奏をしていたコロムビア・ジャズ・バンドのトランプेट奏者でもあり、バリトンの美声が魅力の日系2世、森山久でした。

来日してまだ日が浅く、日本語の歌唱に違和感を覚える箇所があるのですが、もしかしたら服部は、そのあたりのバタ臭さも狙って森山に白羽の矢が立ったのかもしれない。

それから2か月後、服部は、東北訛りの会話にもかかわらず、歌わせるとほかの歌手にはないブルージーでかつ日本の土着性を感じさせない淡谷のり子に『別れのブルース』を提供、「ブルースの女王」への道を開きます。

ブルース歌謡のルーツともなった森山久は、その後、淡谷の伴奏もしていたギターリスト、ティープ・釜泡と親交を深め、ティープの妻の妹でジャズ歌手として活躍していた浅田陽子と結婚、戦後娘を授かります。

昭和42年、娘は自作曲『この広い野原いっぱい』でレコードデビュー、「フォークの女王」森山良子として名を馳せるようになりました。このデビュー曲の編曲を担当したのは、服部良一の長男・克久でした。

